

スリランカと東南アジア大陸部におけるパーリ語文化圏の形成過程

研究代表者 馬場紀寿（東京大学東洋文化研究所助教）

1. 研究の背景と目的

世界の諸文明で用いられてきた学術公用語は、その文明にとって主要な宗教教典の言語だった。西欧のラテン語、イスラーム世界のアラビア語、南アジアのサンスクリット語、東アジアの漢語は、それぞれ、カトリック教会の用いたラテン語訳聖書、イスラム教のクルアーン、ヒンドゥー教のサンスクリット聖典、儒教文献と漢訳大乘仏典の言語である。これらの言語は、民族や国家を超えて、広範な地域で宗教教典の言語として共有されてきた。

そして、スリランカと東南アジア大陸部において、このような役割を果たしたのがパーリ語である。パーリ語は、サンスクリット語同様、古代インド語の一つだが、上座部仏教（上座部大寺派）のパーリ正典の言語であり、スリランカの上座部大寺派が東南アジア大陸部へ拡大するにしたがい、この地において大きな文化的役割を果たしてきた。こうした歴史的経緯から、シンハラ語、タイ語、ビルマ語、ラオ語、カンボジア語には、パーリ語に由来する語彙や概念が数多く共有されており、この点で、これらの地域を「パーリ語文化圏」と呼ぶことができよう。

上座部大寺派は、仏教諸派の中でも、パーリ語の三蔵（僧団規則を定めた律蔵、物語形式で教説を示す経蔵、教理綱要である論蔵）を正典とする一派である。上座部大寺派の出家者は、パーリ語を学習し、パーリ語の経典を朗読し、パーリ語で書かれた註釈に基づいて、経典を理解する。したがって、上座部大寺派の出家者を中心として、パーリ語は広められ、数多くのパーリ語の作品が著されたのである。

ちょうど宗教改革以前のカトリック教会がラテン語訳聖書を正典とし、イスラム教がアラビア語のクルアーンを正典として、それぞれラテン語とアラビア語が古典語の役割を果たしたのと同様、スリランカと東南アジア大陸部では、上座部仏教がパーリ仏典を正典として、パーリ語が大きな役割を果たしてきたのである。

これまでも上座部仏教の東南アジアへの拡大に関する研究は行われてきたが、「パーリ語文化圏」全体を対象として、その形成過程を思想と歴史の両面から調査した研究は十分になされてこなかった。しかし、スリランカと東南アジア大陸部において国家を超えて共有されている正典（パーリ正典）と正典語（パーリ語）を踏まえた研究を行うならば、これまでに着目されなかった新たな成果が期待できる。そのような見通しに立ち、本研究プロジェクトは、「パーリ語文化圏の形成」を歴史的に解明することを目指している。

スリランカや東南アジア大陸部で上座部仏教が主要宗教となった歴史的経緯を解明するには、第一に、五世紀前半、スリランカにおいて確立した上座部大寺派の思想、第二に、

十二世紀、上座部大寺派がスリランカの仏教界を統一する状況、第三に、十二世紀から十五世紀にかけて上座部大寺派が東南アジア大陸部を席卷する過程を調査する必要がある。この三つの作業を通して、今日のスリランカ・東南アジア大陸部における「パーリ語文化圏」の形成過程を考察した。

2. 研究方法

パーリ語の言語学的研究は、いまだ十分には成し遂げられておらず、五世紀に編纂された註釈文献や、十二世紀から十五世紀のパーリ語文献の解説もあまり進んでいない。パーリ語の言語学的研究は欧米を中心に進められてきたが、その成果を踏まえて編纂された辞書に、チルダース (R. E. Childers) の『パーリ語辞典』(*A Dictionary of the Pāli Language*)、リス・デイヴィッツ (Rhys Davids) の『パーリ・英語辞典』(*Pāli-English Dictionary*)、トレクナー (V. Trenckner) によって企画された『批判的パーリ語辞典』(*Critical Pāli Dictionary*)の三種がある。このうち、チルダースの辞書とリス・デイヴィッツの辞書はパーリ正典の語彙を集めたものであって、パーリ註釈文献の語彙はあまり収録していない。また、『批判的パーリ語辞典』はパーリ正典とパーリ註釈文献の両方を包括的に調査した辞書だが、母音とわずかな子音を収録した巻が出版された段階で計画が頓挫してしまった。

こうした状況にあって、イギリスにあるパーリ文献協会 (Pali Text Society) の支援の下、現在、『パーリ語辞典』(*A Dictionary of Pāli*) を編纂しているのが、ケンブリッジ大学のマーガレット・コーン博士 (Dr. Margaret Cone) である。この辞書は、パーリ正典とパーリ註釈文献の両方から包括的に語彙を集めた辞書を完成しようという意図により始められた。

パーリ文献を正確に読解することは、本研究の重要な基礎作業となる。そこで、2008年10月にマーガレット・コーン博士を日本へ招聘し、共同研究を行った。コーン博士との共同研究により、筆者が理解できなかった個所を解説し、本研究の基礎を固めることができた。

本研究プロジェクトにより明らかになった「パーリ語文化圏の形成過程」は、以下の諸節にまとめられる。

3. 上座部大寺派の思想形成 (三世紀—五世紀前半)

マウリア王朝の崩壊後、インドは統一王朝が不在の時代を迎えた。各地の諸王朝の下に散在することになった仏教僧団にも、全体を統括する中央集権的制度は生まれなかった。こうした状況の中、紀元前後から、部派と呼ばれるある種の集団が形成されるようになったと考えられる。碑文を見る限り、遅くとも、一世紀に大衆部と説一切有部、二世紀に法蔵部、三世紀に多聞部、西山部、化地部といった部派名が確認されるようになる。上座部大寺派がはじめて碑文に現れるのも、三世紀である。

おそらく上座部大寺派は、この頃から「上座部」の「大寺」の伝統を意識するようになり、次第に自らの正統性、あるいは他部派に対する自派の優越性を強調するようになる。

四世紀（おそくとも五世紀初頭まで）には、『島史』が著され、上座部が仏教の正統であること、そして、大衆部や説一切有部といった他部派は上座部から分裂していった傍系に過ぎないことが説かれた。

このように上座部大寺派の党派意識が高揚した直後、五世紀前半に、ブッダゴーサはスリランカで活躍し、『清浄道論』『長部註』『中部註』『相応部註』『増支部註』といった作品群を著した。ブッダゴーサは、成仏伝承と修行体系に関して上座部大寺派の思想的立場を形成し、パーリ正典を確定した。当時、大乘仏教は大乘経典を制作し、新たな「ブッダの言葉」を作り続けていたが、上座部大寺派は「全てのブッダの言葉」を定めたことによって、大乘経典を原理的に認めない立場に立つこととなった。

彼によって確立した上座部大寺派の思想を、当時のインド仏教と対比すると、次の表のように鮮やかな対照を成している。

	上座部大寺派	対立する他の仏教
成仏伝承	縁起（無常な諸法）の観察	大衆部・化地部・法蔵部
修行体系	諸行（無常な諸法）の観察	説一切有部・正量部
正典	「全てのブッダの言葉」の定義	大乘仏教

ブッダゴーサ以後、上座部大寺派はブッダゴーサの作品を尊重したため、上座部大寺派の正統的な思想を代表する作品となった。現存する上座部仏教思想の原型は、思想を体系化して正典の範囲を明確に定めたブッダゴーサの作品にこそ見出せる。こうして、上座部大寺派は、インドの主要部派（大衆部、化地部、法蔵部、説一切有部、正量部）や大乘仏教と思想的に袂を分かち、独自の道を歩み始めたのである。

※本節について、詳細は馬場紀寿[2008]参照。

4. 上座部大寺派によるスリランカ仏教界の統一（十二世紀）

スリランカの仏教界は、遅くとも三世紀までには、上座部（Theravāda）と呼ばれる系統が三派に分かれて並存していた。すなわち、上座部大寺派、上座部無畏山寺派と上座部祇多林寺派である。上座部大寺派は、五世紀前半にブッダゴーサが現れて大寺派の思想体系を構築し、大乘経典を斥ける方向を打ち出した。それに対し、上座部無畏山寺と上座部祇多林寺は大乘経典を受容していた。無畏山寺と祇多林寺の遺跡からは、大乘経典を記した碑文や大乘経典の写本が発見されている。

三派の鼎立はしばらく続いたが、十二世紀になると、状況は一変する。時のスリランカ王、パラッカマバーフ一世（Parakkamabāhu I 在位 1153-86 年）が、上座部大寺派をもって仏教の正統とし、無畏山寺派と祇多林寺派を弾圧した。その結果、上座部大寺派がスリランカの仏教界を統一したのである。

ここで注目すべきは、パラッカマバーフ一世がスリランカの仏教界を統一した方法である。パラッカマバーフ一世は出家者に上座部大寺派の戒壇で受戒させた。出家する際の受戒式では、律蔵で示される波羅提木叉という規則が授けられる。上座部大寺派のパーリ正典の冒頭が律蔵であり、律蔵の冒頭に波羅提木叉が説かれることから分かるように、この規則はパーリ正典の一部であり、しかも、正典の中でも最も重視される個所にある。上座部大寺派にとって、「全てのブッダの言葉」を確定しない他派は異端に過ぎない。この点で、大乘経典を受容していた無畏山寺も、祇多林寺も、異端として見なされることになる。上座部大寺派が正統とされたスリランカでは、最終的に両派は滅びてしまったのである。

この時期、スリランカでは『小史』が著され、五世紀に活躍したブッダゴーサがスリランカにおける大寺の伝統を正しく継承した人物であることが強調された。『小史』によると、ブッダゴーサは、『清浄道論』を著した際に「疑いなく、彼は弥勒だ」と僧団から繰り返し言われ、彼が作成した註釈書は「正典のように」受け取られた。この記述からは、シャカムニ仏は正典となる仏語を語り、弥勒仏としてのブッダゴーサは正典のごとき注釈を著したという類比が成り立つ。この時期、上座部大寺派において、ブッダゴーサと彼の作品は、ブッダとブッダの言葉にさえ比べられる権威を得たのである。

以上の『小史』の記述から、ブッダからブッダゴーサ、ブッダゴーサから十二世紀の上座部大寺派の伝統が仏教の正統として位置づけられたことが見て取れよう。

5. 東南アジア大陸部における上座部大寺派の席卷（十二世紀—十五世紀）

上座部大寺派は十二世紀にスリランカ仏教界を統一した後、海外へ進出して、急速に勢力範囲を拡大した。十五世紀に始まる大交易時代までに、東南アジア大陸部の新興国家は積極的に上座部大寺派を自国へ導入し、宗教改革を行った。ビルマのハムサワティ朝（ペギー朝）では、1479年にダンマーゼーディ王（Dhammazedi 在位 1472-92年）がカルヤーニー結界と呼ばれる上座部大寺派の戒壇を設けて上座部大寺派を奨励し、他派の出家者もここで再受戒させたため、ビルマの仏教界は上座部大寺派が独占することとなった。また、タイのスクータイ朝やアユタヤ朝、ラオスのラーンサーン朝も、上座部大寺派を積極的に導入し、出家者はすべてこの系譜に連なることとなった。今日、スリランカと東南アジア大陸部で圧倒的な勢力を誇っている上座部仏教は、例外なく、スリランカから拡大した上座部大寺派が起源となった。

各地で上座部大寺派が支配的になった状況は、スリランカの仏教界を上座部大寺派が統一する過程によく似ている。東南アジア大陸部の各国は上座部大寺派の戒壇のみを正統とすることによって、上座部大寺派の出家者のみが再生産される仕組みを作ったのである。この思想的背景には、「全てのブッダの言葉」を保持しているのは上座部大寺派のみであり、他派は大寺派から分離した異端に過ぎないという理念があったと考えられる。

上座部大寺派を正統とする限りは、各国で盛んに相互交流がなされた。スリランカはビルマからもタイからも戒統を導入し、ビルマやタイもくりかえし他国から上座部大寺派の

戒統を受け入れた。このように、上座部大寺派は戒統の導入によって各国の相互交流を促しつつも、教理的には他派を否定して、パーリ正典を保持する自派を仏教の正統に位置づけ、圧倒的な権威を確立したのである。

6. パーリ語文化圏の確立（十二世紀—十五世紀）

十二世紀以前のスリランカでは、上座部無畏山寺派や上座部祇多林寺派も活動していたから、サンスクリット語で書かれた大乘経典が存在し、大乘経典の文句が碑文に記されたり、大乘経典の写本が作成されていた。また、東南アジア大陸でも、十二世紀以前には、サンスクリット語（あるいは、サンスクリット語とパーリ語の両方）が聖典の言葉として用いられていた。このことは、サンスクリット語を記した碑文が見つまっていること、東南アジアの諸言語にサンスクリット語起源の語彙が数多く含まれていることから推測できる。

しかし、スリランカと東南アジア大陸部では、上座部大寺派が席卷した後、サンスクリット語を聖なる言葉として用いる伝統は衰退し、パーリ正典を唯一の正統的な「ブッダの言葉」として継承するようになった。仏教寺院では、パーリ語正典が学習されるようになり、出家者たちはこのパーリ語正典の読誦・学習を通して、パーリ語を身につけたのである。

この時期を境にして、スリランカと東南アジア大陸部は、パーリ正典を唯一の正統的仏典とし、パーリ語をブッダの言葉をそのままに表現する唯一の言葉として受容するようになった。現代のビルマ語、タイ語、ラオ語、カンボジア語に大量のパーリ語が含まれている歴史的背景には、パーリ正典を「全てのブッダの言葉」と見なす上座部大寺派が仏教界を統一したという事情があったと言えよう。上座部大寺派の信仰を礎として、この地域には、「パーリ語文化圏」が形成されるに至ったのである。

7. 近代における上座部仏教の復興（十九世紀—二十世紀前半）

十九世紀から二十世紀初頭にかけて、タイ、ビルマ、スリランカでは、自国の仏教を改革し、仏教の近代化と国家の近代化を推し進める人物が現れた。タイのラーマ四世（1804-1868）は、戒律を厳守するタンマユット派（正法派）を開き、従来の仏教をマハーニカーイ派（大衆派）と呼んで、改革派であるタンマユット派を支援した。彼の後継者、ラーマ五世（1853-1910）は、タイ版のパーリ正典をタイで初めての活版印刷で出版し、美しい装丁で製本して、世界各国へ贈呈した。ビルマのレディ・セヤドー（1846-1923）は、植民地時代のビルマで反植民地運動に参加し、多数のビルマ語の仏教書を出版し、近代ビルマ仏教に大きな影響を与えた。スリランカのダルマパーラ（1864-1933）は、仏教の近代化運動を進めるとともに、パーリ文献の出版、インドでの仏教復興運動に活躍した。

彼らはいずれも、ほぼ同時期に現れ、仏教の改革を先導したが、それとともに、各国のナショナリズムの形成にきわめて深く関わったという共通点がある。

8. 今後の課題

本研究によって得られた上座部大寺派（上座部仏教）の歴史を踏まえて、上座部大寺派が生まれる時代の状況をより詳細に明らかにするために、今後は、二世紀から五世紀におけるインド仏教を歴史的に研究する。この時期の仏教資料は豊富にある。第一に、二世紀から五世紀にかけて、数多くのインド仏教文献が漢訳された。これらの資料の中には、中国で編纂された文献も含まれているが、インド起源の情報を含むか否かを慎重に検討しつつ扱うならば、インド仏教の資料として極めて価値の高いものである。第二に、近年、アフガニスタンやパキスタンから二世紀頃から七世紀頃に作成されたと考えられるサンスクリット写本が續々と発見されている。漢訳資料とサンスクリット写本を総合的に調査し、さらには碑文資料をも検討するならば、これまで明らかでなかったインド仏教の姿を解明できるだろうと考えている。

<本件に関連した研究成果>

馬場紀寿

[2008] 『上座部仏教の思想形成—ブッダからブッダゴースアヘー』、東京：春秋社。

[2009] 「パーリ文献における禪定論の系譜」、『印度学仏教学研究』第57巻2号、印刷中。

<主要参考文献>

伊東利勝

[2001] 「エーヤーワディ流域における南伝上座部仏教政治体制の確立」『岩波講座東南アジア史第二巻 東南アジア古代国家の成立と展開』東京：岩波書店，pp.287-316.

奥平龍二

[1994] 「上座部仏教国家」『変わる東南アジア史像』東京：山川出版社，pp.90-108.

森祖道

[1992] 「南方上座部仏教の相互交流—サンガ存続のメカニズムと歴史—」『国際文化学と英語教育』東京：玉川大学出版部，pp.251-268.

[1984] 『パーリ仏教註釈文献の研究—アッタカターの上座部的様相—』東京：山喜房仏書林.

[2006] 「スリランカ大乘仏教研究序説」『大正大学総合佛教研究所年報』#28, pp.(113)-(133).

[2007] 「『ニカーヤサンクラハ』の「大乘記述」への批判（I）—スリランカ大乘仏教研究—」『大正大学総合佛教研究所年報』#29, pp.(66)-(83).

[2008] 「スリランカの大乗尊像について—アヌラダプラ時代—」『多田孝正博士古稀記念論集・仏教と文化』東京：山喜房仏書林.

Collins, S.

[1990] “On the very idea of the Pali Canon,” *Journal of the Pali Text Society*, #15, pp.89-126.

v. Hinüber, O.

[1996] *A Handbook of Pāli Literature*, Berlin/ New York: Walter de Gruyter.

Reid, A.

[1993] *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680 vol.2 Expansion and Crisis*, New Haven/ London: Yale University Press.

※ 本研究は、JFE21 世紀財団の 2007 年度アジア歴史研究助成によるものである。ここに記して甚深の謝意を表します。